

広報

第17号

2017年
(平成29年) 8月

目次

ご挨拶	1
受賞	2
国際交流	5
行事紹介	7
歯学研究院・教室紹介	14
若手研究者紹介	17
新入生研修	18
特別寄稿	20
定年退職を迎えるにあたって	23
訃報	25
北海道大学病院歯科診療センターのご案内	26
編集後記	28

北海道大学大学院歯学研究院・歯学院・歯学部・歯科診療センター



(本紙5頁参照)

歯学研究科で「動物供養祭」を挙

歯学研究科では、11月28日（月）午後4時30分から、学部会議室において、動物供養祭を執り行いました。供養祭は、過去1年間に歯学教育・研究のため実験に供された動物（ラット、マウス計1,875体）への感謝と追悼のために毎年実施しており、教職員、学生等の動物実験関係者約30人が参列しました。

供養祭では、最初に横山敦郎歯学研究科長か

ら挨拶があり、次いで動物実験委員会委員長の船橋誠教授から、歯学研究の進歩に尊い命を捧げて下さった多数の実験動物の御霊の安らかなることを願う旨の「祭文（さいもん）」が捧げられ、最後に参列者全員により献花が行われました。

（歯学研究科・歯学部）

参列者に挨拶する横山研究科長

「祭文」を読み上げる船橋委員長



献花する参列者

歯学研究科で自衛消防訓練を実施

歯学研究科では11月8日（火）に自衛消防訓練を実施しました。

今回の訓練は、C棟7階喫煙室から出火したとの想定で、自衛消防隊長である横山敦郎歯学研究科長の指揮により、通報連絡班、避難誘導班、消火班、救護班、防護措置班の各担当に分かれ、現場の確認、消防署への通報、非常放送、

避難者誘導、消火活動等の訓練を実施しました。

訓練終了後、横山研究科長から「今回の訓練は順調に実施できた。災害時にはこの訓練を思い出して行動して欲しい。」との講評がありました。

（歯学研究科・歯学部）



緩降器を使用した避難訓練



消火器操作訓練の様子

お口の健康と歯科医療 その2 —患者サイドに立った知識の浸透—

11月6日（日）

会場：歯学部講堂

主催：歯学研究科

実施責任者：歯学研究科 講師 有馬太郎

歯学研究科では、市民公開特別講座として「お口の健康と歯科医療 その2—患者サイドに立った知識の浸透—」を開催しました。本講座はサステナビリティ・ウィークとの共催であり、また、道民カレッジ連携講座としても開催

しています。前日から雪が降り、当日も雪が残るという悪天候となりましたが、32名が参加しました。

同講座では、食事を楽しくするために必要なお口の健康と、問題が発生した場合の対処法・治療法について紹介することを目的として、一般の方でも十分理解できるわかりやすい言葉で3名の講師が講演を行いました。

歯学研究科長・歯学部長の横山敦郎教授の開会挨拶の後、歯学研究科の有馬太郎講師から「唾



開会挨拶をする横山歯学研究科長



会場の様子

液と摂食嚥下のメカニズム」について、一般社団法人北海道歯科衛生士会・札幌北楡病院歯科衛生士の原田晴子氏から「オーダーメイドのブラッシング」について、最後に北海道大学病院の後藤まりえ助教から「義歯を中心とした補綴治療の現状と義歯に関する留意点（清掃や食事

の仕方）」についての講演が行われました。

本研究科では、今後も研究成果の地域社会への還元の一環として、道民カレッジ等に参加し、市民公開特別講座を企画・実施する予定です。またサステナビリティ・ウィークにも持続的に話題を提供していきます。

歯学研究科が全北大学校歯医学専門大学院との 姉妹校提携25周年記念交流行事を開催

歯学研究科と大韓民国全北大学校歯医学専門大学院との姉妹校提携は、平成2年に創始され、以来25年間という長期に渡る親密な国際交流が行われてきました。平成27年10月には、全北大学校歯医学専門大学院から15名の教員等が本学を訪問され、記念交流行事を開催しました。



全北大学校歯医学専門大学院前にて記念撮影



記念式典での両大学歯学研究科長



記念式典での集合写真

このたびは、平成28年10月9日（日）から4日間、本学から16名の教員等が全北大学校歯科

医学専門大学院を訪問し、同校において記念交流行事が開催されました。

記念交流行事として、10月10日（月）に両校の教育状況に係る意見交換をした後、研究者等による研究講演会が開催され、最新の研究成果についての発表及び質疑応答が活発に行われました。その後、姉妹校提携25周年記念式典が催されました。翌日には、施設見学により韓国の文化・歴史を紹介いただき、両校にとって有意義な交流となりました。

このような記念交流行事を通して、両校の親密な関係を保ちつつ、国際共同研究や国際的な教育を一層発展させられるものと期待しています。

（歯学研究科・歯学部）

歯学研究科で香港大学歯学部学生団体との交流行事を開催

歯学研究科において、10月17日（月）に32名の香港大学歯学部学生を受け入れ、本学教員や学生との交流行事を開催しました。

これは、香港大学歯学部長から、同大学歯学部1年生及び2年生の学生団体を「Study Tour」と称して、本学歯学研究科に訪問させたいとの依頼があり、実現したものです。

交流行事については、井上哲歯学研究科国際交流支援室長と有馬太郎国際歯科部門講師が担当され、初めに横山敦郎歯学研究科長の挨拶、本学の紹介の後、小グループに分かれて北海道大学病院歯科診療センター、歯学部学生実習や講義風景の見学、本学の留学生事情の説明などを行いました。夕方には、本学学生や教員との会食の場を設け、活発な交流が行われました。

同大学からは、次年度においても訪問をしたいとの依頼を受けており、今後更なる交流を深

め、両校の学術交流や学生交流が推進されることが期待されます。

（歯学研究科・歯学部）



北大構内クラーク博士胸像で

大学院歯学研究科がカトマンズ大学歯学部 と部局間交流協定を締結

大学院歯学研究科は、平成29年2月5日(日)、ネパール国Kathmandu University School of Medical Sciences (KUSMS: カトマンズ大学歯学部) と部局間交流協定を締結しました。

カトマンズ大学歯学部で開催された調印式には、大学院歯学研究科から鄭 漢忠教授、林利彦准教授ら4名が赴き、カトマンズ大学からは、Ram Kantha Makaju Shrestha学長、Rajendra Koju 副学部長、本研究科との関係が深いChandan Upadhaya准教授ほか、関係者多数が参加して行われました。

カトマンズ大学歯学部は、首都カトマンズの北東約30キロ、海拔約1,650mのDhulikhel地区に位置し、カトマンズ大学と地域医療の拠点であるDhulikhel病院との共同で、2001年に創設されました。現在では、新しい大学院プログラ

ムが開設されるなど改革が進められています。

カトマンズ大学歯学部との国際交流は、日本口腔外科学会の国際医療協力活動がスタートした2008年に遡ります。2014年からは、毎年開催される日本・ネパールジョイントミーティングへの参加、協働手術や日本人若手歯科医師の臨床研修の実施、さらに、双方の大学への訪問を通じて交流を深めてきました。

調印式でRam K.M. Shrestha学長は、協定締結は新たな関係の始まりであり、両校のこれからの交流発展を願う旨述べられました。今後は、新カリキュラムにおける北海道大学歯学部学生の短期留学や、教員・大学院生の派遣や受け入れ、国際共同研究の実施等、教育研究における更なる交流連携が期待されます。

(歯学研究科・歯学部)



調印後の(左から) Chandan Upadhaya准教授、
Rajendra Koju 副学部長、
Ram Kantha Makaju Shrestha 学長、
鄭 漢忠教授



調印式後の参加者集合写真

【細胞分子薬理学教室の自己紹介】

皆様、こんにちは。細胞分子薬理学教室を紹介します。教室というと学校の部屋を連想されるかもしれませんが、大学の中では教育や研究の一つの単位として教室と呼んでいます。私たちは、薬物に関すること、薬理学を歯学部 of 学生に教えたり研究したりする教育研究組織です。歯学部の中の教室を大きく分けると、実際に患者さんを診て治療を行う臨床系の教室と、臨床歯科医学の基盤となる様々な基礎歯科医学を担当する基礎系教室に分けることができます。薬理学は基礎系教室に属しますが、他の基礎歯科医学をベースに成立する分野であり、薬理学の知識は臨床に直結するため、臨床と基礎の境界にある分野といわれています。

歯科医師は日常の診療の中でたくさんの薬を使います。また、歯科に来る患者さんには他の科で治療を受けておりその治療のために薬を使用している患者さんも多くおられます。各科で治療の目的のために使用される薬は、患者さんの体の中で様々な相互作用をすることも多いので、歯科医師は歯科臨床では使わない薬のことも知らなければなりません。歯科医師にとっては薬に関する知識はとても大切です。教室のス

タッフは歯学部学生に薬理学の講義を行い実習を担当しています。また、大学院歯学研究院は将来の研究者、教育者、優れた臨床歯科医師を育てる役割を担っています。教室スタッフは大学院でも講義を行い、大学院生が博士号を取得するための研究指導を行っています。

教育と並ぶ大事な仕事に研究があります。現在薬理学教室では抗がん剤や麻酔薬、骨粗しょう症治療薬、強心作用薬、歯科治療に使用する薬などに関して研究を行っています。また、骨を作る細胞(骨芽細胞)や壊す細胞(破骨細胞)の機能に、加重などの機械的な力がどのように作用するかといった研究も行っています。

細胞分子薬理学教室という名前、わかりにくいですね。北大歯学部ができてから今年で50年を迎えますが、最初の教室の名前は歯科薬理学教室でした。歯学部だと歯科で、歯科の分野で薬に関することを教えたり研究したりするので歯科薬理学となります。薬理作用の理解が、鎮痛薬を飲んだらどうして痛みが抑えられるのか、解熱薬を飲んだらどうして熱が下がるのかというような作用の機序を、実験動物やヒト全体のレベルで明らかにするのが主である頃は、



教室写真

薬理学だけでよかったのです。しかし、生命科学の進歩により細胞レベル、さらに分子のレベルで生命現象が語られるようになると、薬理学も当然のことながら細胞レベル、分子レベルでの薬理作用の理解を目指すようになりました。そのようなことから、何度か名前が変わったあとに、現在の細胞分子薬理学教室となっています。

現在の教室のスタッフは、教授、准教授（以前は助教授とっていました）、助教（以前の助手）が1名ずつで構成されています。さらに、直接細胞分子薬理学教室に所属する大学院生が3名と、歯科麻酔科、高齢者歯科、口腔診断内科、口腔顎顔面外科、矯正歯科、小児歯科など

の臨床系の教室に所属し、研究のみを細胞分子薬理学教室で行っている大学院生が10名、そして研究生が1名在籍しています。大学院生の中には、社会人大学院生とあって、歯科医院の院長だったり、勤務しながら大学院で学んでいる学生が3名います。また、1名の大学院生と研究生は中国からの留学生ですから、多彩な組織といえるかと思います。皆で、明日の歯科医学・歯科医療のために頑張っています。

さて、そろそろ自己紹介も終わりです。この紹介で、細胞分子薬理学教室って、こんな教室かとわかっていただけたらうれしいです。これからも、どうぞ、よろしくお願いします。

【冠橋義歯補綴学教室の現状】

冠橋義歯補綴学は、失った歯や歯の一部、あるいは歯冠部の形態異常を「冠＝クラウン」やダミーを用いた「橋義歯＝ブリッジ」で、咀嚼、発音、感覚、外観など、顎口腔機能を回復するとともに、顎口腔系の健康維持を謀るために必要な論理と技術を考究する学問です。1971年に歯科補綴学第二講座としてスタートして46年が経過した現在、山口泰彦教授を筆頭に「冠橋義歯補綴学教室」として教室員29名で教育、研究、臨床に取り組んでいます。

<教育>

冠橋義歯補綴学の授業は3年生の前期から始まります。補綴物の種類や使用する材料、歯の切削方法や切削器具、咬合関係、顎運動など、補綴治療に必要な理論や術式についての講義、後期には講義と並行して模型を用いた実技実習を行います。人工歯を切削し、歯列に調和した形態や咬合関係を付与した鑄造金属冠を作製します。また5年前より他大学に先駆け、歯科用CAD/CAMシステムを用いてジルコニアのフレームを作製する実習も始まりました。そして5、6年生では、歯列の印象採得や支台歯形成など、外来における参加型臨床実習を行います。

<研究・臨床>

顎口腔領域は、咀嚼や無意識下の歯ぎしりや咬みしめ習癖であるブラキシズムなど、咬合接触と関連しながら様々な力が働く特殊な環境です。そこで生じる障害を解決し、咬合、顎筋や周囲組織を機能的、形態的、審美的に調和させることを目的として、研究と臨床の2方向からアプローチしています。

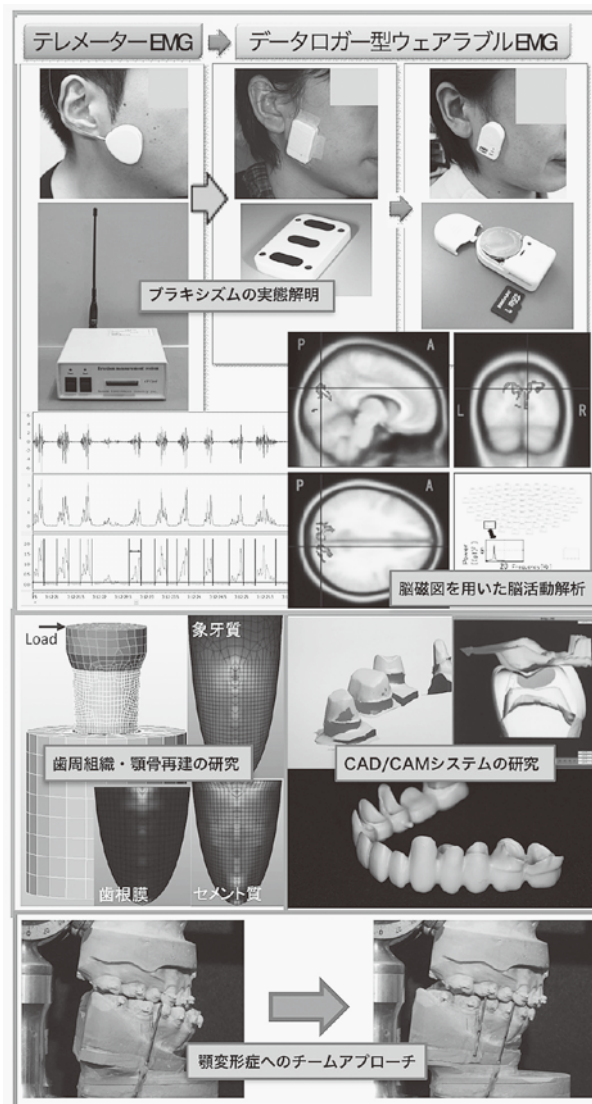
現在取り組んでいる研究テーマは、ブラキシズム、睡眠時無呼吸症候群、咬合と脳機能などの顎機能関係、CAD/CAMシステムや3Dプリンタを用いたデジタル分野の応用、顎変形症・顎顔面補綴、再生医療や代謝の基礎分野です。例えばブラキシズムについての研究では、これまで困難であった診療室外での終日咀嚼筋活動計測に超小型携帯型筋電計を用いることにより、把握されていなかった日常生活におけるブラキシズムの実態がわかるようになりました。睡眠時無呼吸症候群は医科と連携し、症状の軽減を目的とした口腔内装置の装着とその効果についての解析も行なっています。また、教室開設当初から手がけてきた歯科用CAD/CAMシステムの普及に伴い、ジルコニアやハイブリッドレジンなど、材料的にも補綴物の種類が拡大され、金属アレルギーへの対策、審美性の

追求など、メタルフリーによる冠橋義歯補綴物の需要が増加し、外来での診療レベルの向上が求められております。さらにデジタル分野の応用の一端として、歯の切削ラインが歯肉縁より深く、従来法による印象採得で苦慮している現状への新たな方策として、近赤外光を利用した光学印象法に取り組んでおり、臨床手技の簡便化を目指しています。一方、歯を支持する骨組織、顎骨欠損部や歯周組織欠損に対して、組織

誘導とスキャフォールド（＝足場）を応用した再生医療や代謝といった基礎的研究も行なっています。

近年、日常生活の中で高性能かつ利便性を備えた様々な技術や製品が多方面で開発、産出されており、歯科分野でもどんどん導入されています。当教室もその牽引的立場に立てるよう、教育、研究、臨床に尽力する所存です。

（文責：佐藤 華織）



若手研究者紹介

異分野から歯学部へ

北海道大学大学院歯学研究院
(口腔機能学講座 口腔生理学教室)

久留和成

「歯学部で糖尿病の研究？」私の研究内容を説明すると、大半の方からこのような反応が返ってきます。「異分野若手研究者紹介」という内容で原稿依頼を受けた際、「若手」や文章力の有無はともかく、「異分野」という点においては、歯学部で私ほどふさわしい書き手はいないように思い、喜んで原稿執筆を引き受けさせて頂きました。

歯学部では、高度な専門性が必要とされる事、また歯科医療に携わる事から、スタッフの大半は歯学部卒業生に占められており、異分野から参入している人材は少ない様に見受けられます。私自身は、学部や研究室を転々としており、大学に関しては勤務先を含めると北海道大学が6大学目になり、まさに歯学部のなかでは異分野代表の様な存在かもしれません。一箇所に落ち着かないと言う経歴は、移り気ととくマイナスに評価されてしまいますが、異分野から他分野に参入すると、専門家と違う視点からその学術領域の課題に気がついたり、これまでの経験・知識を活かし、専門家の方々に分野を超えた情報を提供できたりとプラスの側面もあります。過去、所属していた学部や大学は複数にわたると書きましたが、一貫して「生理学」と言う学術領域で研究を行ってきました。生理学という学問は、広辞苑によると「生体またはその器官・細胞などの機能を研究する学問」と説明されていますが、一般の方にはどういう学問かわかりにくいかもしれません。例えば、テレビをつければ「脳科学」やスポーツ選手の「トレーナー」、ドラマなどでは生死の境を演出する際に、「心電図」などが用いられますが、これら全てが生理学に関連しており、ノーベル賞にも

「生理学・医学賞」が有る様に裾野の広い学術領域です。話を文頭の話題に戻しますが、私は、歯学部に赴任する前は医学部にて糖尿病に関する生理学を軸にして研究を行ってきました。糖尿病は合併症として、脳梗塞や狭心症などがよく知られていますが、口腔機能にも様々な影響を及ぼします。免疫力の低下や唾液分泌能の低下に伴い歯周病リスクが上昇するという報告や、重度の歯周病が糖尿病治療の妨げになるという報告も有り、糖尿病治療と歯科治療は以外と深い関係があります。その問題をテーマに研究をしています。と、言えばもっともらしく聞こえますが、私自身、基礎的な研究というのは、即、画期的な治療法や診断方法に繋がるわけではなく、先人達の地道な研究や実験から得られた知識の蓄積が、長い年月を経て、「結果的に」新たな治療法や病気の解明へと繋がっていると考えています。私の研究もそのような知識の蓄積の一助になればと思い、異分野からの視点を忘れずに日々研究を行っています。



教員スタッフ

2017年度新入生合宿研修

合宿研修を終えて

学友会運営委員長

歯学部5年 萩野谷 大

四月、新入生（49名）と二年次学部移行生（10名）を対象とした合宿研修が、ルスツリゾートにおいて行われました。さらに先生（25名）と上級生（50名）にご参加頂き、二日間の過密なスケジュールにご協力頂きました。

ーより密な先生との交流をー

昨年までの反省を踏まえ、今年度は先生と学生の交流の時間を設けました。

写真のように、内側に座った新入生が、外側に座った先生・上級生に対して1対1の面接形式で自己アピールをします。事前に用意してもらった自己紹介カードを用いて、フリートークをしてもらいました。1分の制限時間が終われば隣に移り、それを1時間にわたり続け交流を行いました。夜の遅い時間でしたが、制限時間が短く感じられるくらい盛り上がり、用意した飲み物がなくなるほどの熱気に包まれていました。

初の試みで、うまくいくか心配はありましたが、終わってみればもう少し話したかったと言ったご意見を多く頂きました。新入生はそれ

ぞれに個性的な自己紹介カードを事前に作成し、交流会では先生や先輩を前にして緊張が続いたようでとても疲れた様子でした。

ーグループワークー

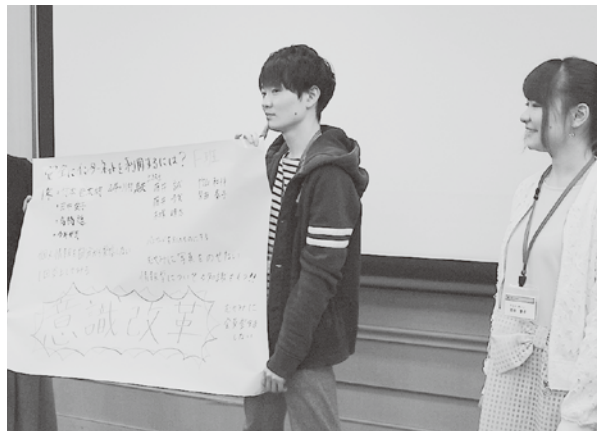
今年のテーマは「インターネットの適正利用について」で、9グループに分かれてグループワークを行いました。これからの6年間の学生



発表に向けての資料作り。レイアウトや見やすいデザインを一生懸命に検討中。



1分フリートーク



みんなの前に出て発表。
笑顔がとても初々しいです。よく頑張りました。

生活を想像し、理想の歯科医師像を目指す中で必要となる医療人としてのモラルについて深く考え討論しました。

—合宿研修を終えて—

新入生に対して学部をあげて大規模な研修を行うことは、北大の他学部や全国的にみても珍しいと聞きます。また合宿研修を行うことで、同期との横の繋がりとともに、縦の繋がりを作ることができるチャンスだと思います。

帰りのバスの中での感想には、「正直最初は、めんどくさかった。だけど終わってみればすご

くいい思い出になった。」と新入生からの報告がありました。確かに研修という言葉には少し硬いイメージがありますが、最終的には新入生も上級生も二日間のイベントを通し楽しんでくれた様子でした。

最後に、私自身が今年度は学友会委員長として運営側に回り参加させていただいて、この合宿は多くの先生や教務部職員の多大なご協力の基に成り立っていると実感いたしました。忙しい中こんなにも先生と上級生が後輩を思い、場を与えていただける北大歯学部ってとても素敵だと思いました。



各部屋での様子。先輩後輩で同じ部屋に集まり、トランプや人狼ゲームなどで遊んでいたそうです。



寝坊してしまったMくん。
優しい先生のおかげでしっかりと反省し、みんなから笑いを取ることができました。



全員集合写真

スウェーデン・ウメオ大学歯学部留学を終えて

北海道大学病院 研修医
(北大歯45期卒)

丸岡春日

スウェーデンには歯学部のある大学が4つしかありません。そのうちの1つがウメオ大学です。「ウメオ」はスウェーデンの北部にある都市で、自然が多く、日本よりも寒いところでした。北極に近いので運が良ければオーロラを見ることができ、私たちが訪れた2月はオーロラのシーズン終盤でした。

そもそも私はこれまでに1度しか海外へ行ったことが無く、加えて寮での初めての一人暮らしはかなりの不安を伴うものでした。しかし、同じ寮に住む各国からの留学生は皆気さくで、料理中に話す機会も多かったので、すぐに慣れることができました。スウェーデンではTVや教科書等が英語であり、皆母国語の様に英語を話すので、コミュニケーションは全て英語でした。英語に関しては、国試の勉強と並行して準備していたこともありますが、スウェーデンの人たちにとっても英語は第二言語なので、私たちの気持ちを理解してくれたこともあり、それ程困ることはありませんでした。

ウメオ大学ではbuddy systemが取り入れられていて、今回は4年生の6人の学生がbuddyに志願し、私たちの大学生活だけでなく日常生活すべてをサポートしてくれました。留学中は様々なハプニングもありましたが、彼らは皆寛

容で優しく、彼らの助けによって乗りきることができました。ウメオ大学では主に、学生が術者となるstudent clinicの見学をしました。スウェーデンの歯学教育は5年制で、歯学部を卒業すれば試験を受けずに歯科医師になることができます。さらにウメオ大学では、講義と模型実習のカリキュラム終了後は早くから指導医の下で実際の患者さんの治療を行っていました。これは、北大での病院実習が主に見学・介助であった私たちには驚くべきもので、4年生から患者さんの予約から診査診断、そして治療まで自分たちで行っている学生たちは自分よりも大人びて見えました。他にもスウェーデンの保険制度では小児期に保険で矯正治療を受けられること、予防歯科で使われるフッ素の量が日本の規定量より多いこと、歯科医師をとりまく社会状況など、日本と異なる点が多く、それらについて毎回buddyや先生方と意見を交わすことができました。

一方で、私が6年間北大で学んだ基本的な知識は世界の共通言語だという事にも気が付きました。日本との違いに目が行きがちですが、共通点にも気が付くことができ、それが自信にもつながりました。

また、今回は担当の先生がとても柔軟に対応



してくださり、私が矯正歯科に興味があると伝えると、快くスケジュールを変更してくださりました。そのおかげで北大では見ることのできない技術やスウェーデンでの健康保険と矯正歯科の関係など、多くを学ぶことができました。

大学での生活はもちろん、学外での生活でも学ぶことは多く、buddyが美術館や図書館、湖でのクロスカントリースキーなどに連れて行ってくれたり、ホームパーティを開いてくれたりしました。

留学を通してスウェーデンの歯学、文化やそこで暮らす人々の人間性などをより深く知ることができましたが、それは実際にその土地に住み、その土地の人々と直接関わる「留学」であったからこそできたことだと思います。英語が少しできるだけで想像以上に多くの貴重な経験ができました。ウメオで過ごした時間やそこで出会った人々とのつながりは私の人生の財産になっています。

スウェーデン・ウメオ大学歯学部留学を終えて

北海道大学病院 研修医
(北大歯45期卒)

三浦和仁

平成29年2月7日から3週間の日程でスウェーデンのウメオ大学歯学部には交換留学する機会をいただきました。ウメオ大学はスウェーデン北部最大の都市ウメオにある公立大学で、歯科学校を前身として1965年に設立されました。ウメオ大は留学生の満足度が非常に高い大学で、その理由の一つとしてバディシステムというものがあります。これは留学生に対してバディと呼ばれる学生が付き、日常生活や実習のサポートをしてくれるというものです。私たちの時は6人の学生がバディに立候補してくれ、実習だけでなく、休日も多くの時間を共に過ごすことができました。

スウェーデンの歯学部教育は5年制で日本の6年よりも短く、加えて、国家試験や研修医制度が存在しません。この話を聞いた当時は国家試験の受験を終えたばかりだったので、試験がないことが少し羨ましく感じました。しかし、それだけ学習の動機となるものが少ないわけなのでむしろスウェーデンの方が大変なのかもしれません。

大学での実習は4年生の診療の見学や介助が主でした。ウメオ大学にはスチューデントクリニック(学生専用診療室)があり、臨床実習中

の学生が2人1組で教官の指導を受けながら診療しています。学生が診療する場合は一般の歯科医に比べて時間がかかる代わりに治療費が1/10程度でとても安いのが大きな特徴です。患者さんは上記のことを了承してスチューデントクリニックを選んでいるので、学生が余計なプレッシャーを感じずに診療ができ、とても良いシステムだと思いました。また、北大では見学がほとんどで1人の患者さんの全ての治療を学生が受け持つということは少ないですが、ウメオ大では見学の機会がほぼない代わりに先生と相談しながら、診査、診断、治療計画の立案、処置などの全ての課程を学生が行うため、多くの経験を積むことができます。一緒に実習をした学生に話を聞いてみましたが、もっと色々な症例を見学したいので北大のシステムが羨ましいという人もいれば、手を動かさず方が多くのことを覚えられるのでウメオ大のシステムが良いという人もおり、どのようなシステムが良いかは人それぞれでした。

加えて、実習の中でスウェーデンが予防歯科の先進国と言われている理由を知ることができました。1つ目はフッ化物の使用量です。日本では成人の歯に対してフッ化物のゲルの塗布を

行っているところを見たことがありませんでしたが、ウメオ大学では多くの患者さんに使用していました。また、ゲルに含まれるフッ化物の濃度に関しても日本の2倍以上で大きな差がありました。私が一番驚いたのは、日本では歯科医師の処方がないと買うことができないフッ化物入りのマウスウォッシュがスーパーやドラッグストアで当たり前で売られていたことです。他にもフッ化物入りのキャンディやタブレットなど日本では見られないものがあり、面白かったので色々日本に買って帰りました。理由の2つ目は保険制度です。スウェーデンでは21歳まで歯科の料金がかかりませんが、それ以降は補助制度があるものの基本的に自費診療になります。そのため、小さい頃から歯科医院に行く習慣ができ、歯科医はう蝕や歯周病予防の教育を繰り返すことができます。さらに22歳からは歯科治療で高額な料金がかかるようになるので、予防に関心を持つ確率も上がります。それに対して日本の保険制度は誰でも安い料金で歯科治療を受けることができるという素晴らしいものですが、歯が痛くならないと受診しないことが多いので予防に対する関心は低くなりがちです。予防に対する関心をどう高めてもらうかが日本の歯科界の今後の課題なのだと思います。

この交換留学の募集を見て参加したいと思いましたが、英語で会話できるのか、歯科治療に関する説明を理解できるのかという不安から参加希望の申し込みを期限の直前まで迷いました。しかし、実際にスウェーデンに行ってみると日本語が使えない状況になったからか、言われていることを理解できるようになっていました。また、日本の治療の方法や手順などの質問

に対しても正しい文法ではなかったですが説明することができ、簡単なディスカッションも行えました。休日はスキー旅行、美術館訪問、街の散策、IKEAでランチなど、たくさんの楽しい時間をバディのみんなやウメオ大から交換留学生として来ていたErik、Saraと過ごすことができました。特に印象に残っているのは凍った湖の上でスケートとクロスカントリースキーをしたことや、屋外でバーベキューをしたことです。北欧ならではの休日の過ごし方を体験できたことは一生忘れることのない思い出となりました。

3週間という短い期間の留学でしたが、スウェーデンと日本を比べることで日本の歯科の良いところ、やスウェーデンから取り入れたいなどと思うことなどたくさんの気づきを得ることができ、また海外での生活を経て自分自身の成長を感じることができました。現地でお世話になった先生方、バディのみんな、Erik、Sara、そしてこのような機会を与えてくださった井上先生と有馬先生をはじめとする先生方に感謝申し上げます。



定年退職を迎えるにあたって



大学院歯学研究科 教授

柴田 健一郎

生年月日 昭和28年5月26日

【略歴】

昭和51年3月 京都大学農学部卒業
 昭和53年3月 京都大学大学院農学研究科修士課程修了
 昭和53年4月～昭和56年3月 民間企業技術部社員
 昭和53年8月～昭和56年3月 国立予防衛生研究所歯科衛生部研究生
 昭和56年4月 長崎大学歯学部助手
 昭和63年1月 歯学博士（東京医科歯科大学）
 平成元年6月～平成3年7月 米国アルバート・アインスタイン医科大学留学
 平成3年9月 北海道大学歯学部助手
 平成8年4月 北海道大学歯学部助教授
 平成12年4月 北海道大学大学院歯学研究科助教授
 平成13年8月 北海道大学大学院歯学研究科教授

昭和53年に京都大学の農学研究科修士課程を修了し、京都での6年間の学生生活を終え、岡山の民間企業の技術部に就職しました。就職後4ヶ月で東京の国立予防衛生研究所（現国立感染症研究所）歯科衛生部に出向を命ぜられました。このことが契機になり、昭和56年4月には長崎大学歯学部助手に採用されました。平成元年6月から2年間の米国留学を終え、平成3年7月に長崎大学に戻り、その年の9月に北海道大学に転任してまいりました。平成13年8月に教授に昇進させていただきました。教授就任以来15年間で、満足できるほどではありませんが、それなりの業績は残せたような気がします。それは北海道大学という素晴らしい環境、教室の

スタッフならびに研究に携わってくれた大学院生のお陰であり、北海道大学と弟子達に心から感謝しております。これまで、長崎、京都、岡山、東京、ニューヨーク、札幌といろいろなところを渡り歩きましたが、これまでの人生の中で札幌での25年間で最も長く、札幌は第二の故郷になっています。今後の2年間は特任教授として研究・教育生活の締めくくりの時間にしたと考えています。

最後に、これまでご指導・ご鞭撻いただいた数多くの皆様に深く感謝申し上げますとともに、北海道大学の今後益々の発展を祈念しています。



大学院歯学研究科 准教授

小林 國彦

生年月日 昭和29年3月14日

【略 歴】

昭和56年3月 北海道大学歯学部歯学科卒業
昭和56年4月 北海道大学歯学部助手
昭和61年11月 北海道大学歯学部附属病院講師
平成2年3月 歯学博士（北海道大学）
平成15年10月 北海道大学医学部・歯学部附属病院講師
平成16年4月 北海道大学病院講師
平成25年12月 北海道大学大学院歯学研究科准教授

北海道大学に入学して以来42年が過ぎました。北大を選んだ理由は父が転勤族だったため、まだ住んだことがないところ、という単純なものでした。入学してみると大学の99期生であり、歯学部の9期生ということでした。伝統ある大学の新しい学部ということで、それぞれのいいところがある過ごしやすい環境でした。先輩たちはあまり高圧的ではなく、フランクに議論ができる、そういう校風があったと思います。開業医になることを漠然と考え、その準備として第二補綴学講座に入局したのですが、いきなり助手となり、昨日まで学生だった身から、目が覚めると教官になっているという、今では考え

られない時代でした。入局後は新米教官として、また研究者として忙しい毎日を送りました。毎日夜中まで働く生活が続きましたが、仲間に恵まれ、楽しく仕事ことができました。16年前に高齢者歯科学教室に移りましたがこちらでもよき先輩、後輩に恵まれました。そのおかげで、開業もせず、北海道に住み着いて、北海道大学の教官として定年を迎えることになりました。大学でしかできない歯科医療などもいろいろやることもでき、充実した大学生活だったと思います。支えてくださった先輩、後輩に心から感謝申し上げます。



名誉教授

戸塚 靖 則

(享年68歳)

名誉教授 戸塚 靖則先生が平成28年5月28日に逝去されました。先生は昭和48年3月に北海道大学歯学部をご卒業され、昭和51年4月に北海道大学歯学部口腔外科学第一講座助手に採用されました。その後、昭和55年9月に歯学博士の学位を授与され、平成4年9月に同大学歯学部口腔外科学第二講座教授に昇任されました。先生は退職するまでの36年にわたり、大学院ならびに学部学生の教育にあたり、平成9年から平成11年、平成15年から平成19年まで(3期6年)歯学研究科長・歯学部長ならびに本学評議員を務められました。

研究科長・学部長在職中は歯学部改革に積極的に取り組み、平成12年には歯学部の大学院重点化を実現されました。さらに、米国オレゴンヘルスサイエンス大学、韓国全北大学校、中国ハルビン医科大学、中国医科大学口腔医学院との学術交流を積極的に推し進め、バングラデシュ・サッポロ歯科大学の創設にも多大な貢献をされました。

研究面においては下顎歯肉扁平上皮がんの顎骨への浸潤機序を解明し、同手術における下顎

骨温存の選択基準を明確にされました。これらの論文はAJCC Cancer Staging Manualに記載され、世界の標準治療となりました。

学会活動では、日本口腔科学会理事長をはじめ、日本口腔外科学会、日本口蓋裂学会、日本歯科医学教育学会、日本頭頸部癌学会、日本顎関節学会など多くの学術団体において理事・評議員として学会運営に尽力され、また平成20年には第19回日本スポーツ歯科医学会総会・学術集会、平成21年には第54回日本口腔外科学会総会・学術大会、平成22年には第64回日本口腔科学会総会・学術集会を主管されました。

学外委員としては歯科医師国会試験・試験委員、日本学術振興会科学研究費委員会専門委員、大学基準協会大学評価委員会などを歴任され、さらに、近年は日本学術会議連携会員(平成18年-平成20年、平成26年-)、日本学術会議会員(平成20年-平成26年)として歯科医学ならびに歯科医療の発展に主導的な役割を果たされました。

ここに謹んで心よりご冥福をお祈り申し上げます。

北海道大学病院歯科診療センターのご案内

最近、歯に関して気になることはありませんか？ もしあれば、北海道大学病院の歯科外来をご受診下さい（健康保険証をご持参下さい）。皆様の受診をお待ちしております。定期的な歯の健康診査や歯石の除去、歯に関する相談だけでも歓迎いたします。

なお、当院では平成26年6月から新来予約制を導入しております。受診される場合は原則として事前予約が必要です。ご理解とご協力のほど、よろしくお願いいたします。

○事前予約の方法

- ・電話にて予約する

〈予約受付専用電話番号〉 011-706-7733

〈予約受付時間〉 平日9時00分～16時00分（なお、翌日の予約受付は15時00分まで）

※矯正歯科については、電話を受けた7日以降の予約となります。

※紹介状に記載されている当該歯科医師の診察を受けられない場合もありますので、ご了承下さい。

※電話予約の際は以下の内容を確認させていただきます。

1. 氏名
2. 性別
3. 生年月日
4. 連絡先（住所・電話番号）
5. 症状（診療科）
6. その他（当院での受診歴や紹介状の有無など）

※紹介状がなくとも予約受診できますが、その場合、初診料の他に特定療養費制度に基づく特別の料金として、3,240円を自費（保険外料金）でお支払いいただくこととなりますので、ご了承願います。

○歯科診療センターのご案内

☆第一診療室（2階）

予診室

☆第二診療室（2階）

小児・障害者歯科（TEL 706-4355） 小児と知的障害者の歯科治療と口腔管理

☆第三診療室（3階）

口腔内科（TEL 706-4349）

口の粘膜の病気の治療、口腔ケア

口腔外科（TEL 706-4349）

顎や口の中の外科治療

矯正歯科（TEL 706-4352）

歯ならびやかみ合わせの治療

歯科放射線科（TEL 706-4356）

放射線治療前後の口の中の管理

顎関節治療部門（TEL 706-4386）

顎関節症の治療

顎口腔機能治療部門（TEL 706-4388）

顎変形症、口蓋裂患者の総合的治療

口腔インプラント治療部門（TEL 706-4391）

人工歯根による歯の回復

歯科手術センター・歯科麻酔科（TEL 706-4345） 歯科治療のための麻酔管理、ペインクリニック

☆第四診療室（4階）

歯冠修復科（TEL 706-4346）

新しい材料を用いた、むし歯の治療

義歯補綴科（TEL 706-4346）

入れ歯による、かみ合わせの回復

高齢者歯科（TEL 706-4358）

高齢者の歯の治療、口腔管理

口腔総合治療部

☆第五診療室（5階）

予防歯科（TEL 706-4342）

定期歯科健診と予防処置、口腔ケア全般

歯周・歯内療法科（TEL 706-4343）

歯の根の治療、歯周病の治療

冠橋義歯補綴科（TEL 706-4343）

冠、ブリッジによる、かみ合わせの回復

口腔総合治療部

☆グループ系専門外来

口臭外来（予防歯科 TEL 706-4342）

歯ぎしり外来（歯周・歯内療法科 TEL 706-4343）

摂食、嚥下機能外来（口腔内科 TEL 706-4349）

審美歯科外来（歯冠修復科 TEL 706-4346）

口臭でお悩みの方

歯ぎしり、くいしばりでお悩みの方

摂食、嚥下障害のある患者さん

歯や歯ぐきの着色、変色の治療

編 集 後 記

今年も広報誌第17号を皆様にお届けできることを嬉しく思います。昨年、そして一昨年の編集後記でも書きましたが、例年と同じにならないようにと・・・思いながらも、やはり今年も同じ内容と企画になってしまいました。来年こそは何か新たな企画の一つは入れたいと思います。

今年も歯学部学生に原稿を依頼したところ、快く引き受けてくれました。萩野谷さん、新入生合宿研修の記事、ありがとうございました。大学院生の柳先生、国体入賞おめでとうございます。東京オリンピックを目指して頑張ってください。今年も卒業生を含む北大歯学部の学生が様々な場所で活躍していることを本当に頼もしく、そして嬉しく思います。原稿を送ってくれた皆様にはこの場をお借りして御礼申し上げます。

本誌に対する皆様からのご意見、ご要望などがございましたら、巻末に挟み込みました葉書にて当委員会までお知らせ下さい。

(2017年7月 広報委員会委員長 土門卓文)

この広報誌の編集を微力ながら担当させていただいて参りました。その中で歯科界が変化していく中、北海道大学も変化し、歯学部、歯科研究科もその変化が加速しております。今年からは名称も変更になり、次世代の教育の場として変貌していくと思われれます。そのためにも皆様により多くのことを広報して行ければと思っております。後もよろしく申し上げます。

(広報委員会編集人 金子知生)

郵便はがき

060-8586

52円切手
をお貼り下
さい

(受取人)

札幌市北区北十三条西七丁目

北海道大学大学院歯学研究院・歯学院・歯学部

広 報 委 員 会
行

広報誌へのご意見・ご要望等をお書き下さい

差し支えなければご連絡先をお書き下さい

お名前 _____

ご住所 〒 _____

電 話 _____



韓国全州市豊南門



北海道大学大学院歯学研究院・歯学院・歯学部・歯科診療センター広報

第17号 2017年（平成29年）8月発行
北海道大学大学院歯学研究院・広報委員会

編集人 兼平 孝・金子 知生
発行人 土門 卓文
印刷・製本 株式会社正文舎